頬に雨が降る

夏樹

時期がすこしだけ早くて、さくらのつぼみがまだ固いままの日。『晴れの日』なんていうくせに、冷たい雨が朝からやまない日。

そんな日に、私たちは胸元に桜を咲かせた。

「結局、雨降りっぱなしでしたね」

「そうだねえ。傘が手放せなかったよ」

ぱちんと傘の留め金をとめて、待合室の冷たい椅子に座る。倣って後輩くんが隣に座った。こういうとき、スラックスは便利そうでいいな、と思う。剥き出しでプラスチックに触れている太ももがちょっと痛い。

卒業式の間、私は一滴も涙を溢さなかった。目も鼻の頭も真っ赤にさせて泣いていた友人もいたけれど、担任の言葉で湿っぽい空気になったけれど、泣かなかった。卒業アルバムの白いページを黒ペンで埋めているときにも、友人同士で写真を撮っているときも、いくら瞬きしても涙はこぼれなかった。「絶対また会おうね！　約束だよ」なんてありきたりな言葉でさよならして、一息ついたって目は乾いたままだった。

クラスが嫌いだとかそんな理由じゃなくて、卒業のムードに体が追い付かなかったのだ。紅白の垂れ幕や校門前の看板がわざとらしい気すらした。いつもの体育館の暖かい茶色のほうがよっぽど泣けそうだった。垂れ幕を捲ったら日常に戻れるのに、と式中恨めしく赤と白の縞々を見つめていたせいか、まだ目がちかちかする。

「もう明日から先輩はいないんですね」

「いないよ。……まあ、たまには来るだろうけどね」

急行電車がホームに滑り込んで、口を大きく開けて何人かを飲み込む。「乗るっけ？」と隣を見やると、小さく首を振られた。うち、各停しか停まらないんで、と呟いた彼の唇から、白い息がわずかに漏れる。

最寄り駅どこなの。

青葉駅です。

そうなんだ、知らなかったよ。

この後輩くんと帰るのは今日が初めてだ。卒業式の後に開いた部活の三送会で、「先輩って緑が丘線でしたよね？」と突然尋ねられたのだ。俺も緑が丘線使うんで、良かったらいっしょに帰りましょう、と。特別仲が良かったわけではない。ただ、同じ一年生とはしゃいでいる姿や、声をかけると見せてくれるはにかんだ笑顔が、誰にも告げたことはないけれど実はこっそり好きだった。子どもみたいな淡い想いだった。

彼のことで今でも一番覚えているのは、夏休み明け一発目の部活の日だ。後輩くんは入学してしばらく、目にかかるかどうかの前髪で、髪型は耳にかぶるくらいの長さをキープしていた。

しかし夏休み明けのその日、風紀委員に捕まった、とぼやきながら扉を開けた彼の髪の毛が、さっぱりとした短髪になっていたのだ。うちの学校では頭髪検査は長期休暇明けのみとゆるい校則なのだが、その検査のことを知らなかったらしい。落ち着かない……と恥ずかしそうに額を隠している姿を見て、かわいいなあと素直に思った。それについて触れたことはなかったし、その後わりとすぐに私が引退してしまったけれど、あの姿は目に焼き付いたままだ。

急行電車が走り去り、ホームに人がいなくなる。

少し長い前髪が目元を隠すから、隣の顔はよくわからない。そういえば、冬休み明けの頭髪検査は切り抜けたのだろうか。受験期で自由登校だったから、彼と会う機会は皆無に近かった。久しぶりに見ると思ったより大人っぽくて、でもやっぱりまだ幼い。入部直後と比べて制

服も着慣れたように見えるけれど、三年生の私から見たらまぶしいくらいにあどけない。私は春から大学生だが、後輩くんは来年もまたあの校舎にいる。その差って、案外大きいらしい。

「……大学、どの辺でしたっけ」

「え？　え、っと、東京だよ」

「一人暮らしですか」

「そうなるね。今、準備中」

ふうん、とひとり納得したような声の後に、また沈黙がたゆたう。夜も遅いからか、なかなか電車が来ない。雨だけはかろうじて見えるが、星も出ていないせいで、外は底なしの暗闇だった。

「明日から、部活も静かになりそうですね」

「毎年この時期はねえ。でも、三年も寂しいだろうし、たぶんすぐ遊びに来ちゃうと思うよ」

半分本当で、半分嘘。毎年卒業生は「また遊びに来るよ」と言っているけれど、継続して来てくれる人は全然いなかった。私もきっとそっち側だろう。あの時は寂しいと思っていたけれど、実際出ていく立場になるとよくわかる。私たちはこれから先、何度母校へ足を運んでも『お客さま』として扱われるんだろうな、って。

「すぐに後輩も入ってくるし、忙しくなるよ。静けさなんて感じる暇、あんまりないかもね」

笑って言ってはみたが、後輩くんはずっとしとしとと泣く外を見つめていた。窓ガラスに水滴がくっついて、ひと筋下へと伝っていく。そんな空みたいに私もあの場で泣きたかった。卒業式に浸れるみんなが、ほんのすこしだけ羨ましかった。

傘の先端から小さな水たまりができている。ずっと座っていたから、椅子も体温で暖かくなっている。

このまま電車が来なかったら、私はまだ高校生でいられるだろうか。明日もあの門をくぐって、さっぱりした体育館や教室に入れるのだろうか。まだ、この後輩くんと話はできるだろうか。なんで今更、こんなことを思うのだろうか。

「……俺、先輩と同学年がよかったです」

窓のほうを向きながら、打ち明けるみたいに小さな声で言うものだから、聞き逃してしまうところだった。

「そうしたら、いっしょに卒業できましたよね」

いつもみたいなはにかんだ笑みではなくて、諦めが混じった口先だけの笑顔。前髪が目元に影を落としているせいで、泣いているようにも見えた。冗談やめてよ、なんて笑える雰囲気じゃなかった。

こちらに向き直った後輩くんの膝が私のものとぶつかる。わがまま言わせてください、と律義に一礼された。頷くより先に彼の唇が開く。

「卒業しないでください。まだ、来年もここにいてください。明日からどこ探しても先輩がいないとか、嫌です。俺、先輩のこと」

ホームに気の利かないアナウンスが響き渡った。

どうやら、電車が来るらしい。触れていた膝がびくりと跳ねて、先程までが嘘のように静かになった。言いかけていた台詞を飲み込むように、喉仏が上下する。

「……先輩のこと、ずっと尊敬してます。俺、一本後の電車で帰るんで」

「尊敬、って」

恐る恐る手を伸ばしかける。心臓の音が期待に騒いだ。もしかしたら同じ感情を持っているかもしれない。もしかしたらつき合わせた膝が震えているのは私だけではないかもしれない。もしかしたら、もしかしたら。

でも、やめた。緊張で冷たくなった手を引っ込める。だってもうすぐ電車が来てしまう。二番線に、私の乗る電車が。彼の乗らない電車が。

待合室の扉を開くと、外はまだ雨が降っていた。遠くに見えていた光がどんどん近づいてくる。これに乗ってしまえば私はもう高校生じゃない。後ろで何も言わない後輩くんのほうを向いてみると、待合室のあの時より距離ができていた。暗がりの彼は、今なにを考えているのだろうか。

「言って」

「え？」

聞き返す彼に、とびきりの笑顔を投げつける。見えなくていい、見ないでほしい。最後の『先輩』の顔なんて。

「卒業おめでとうございます、って言って」

卒業しないでほしいと言ってくれたのに、このお願いはあまりに酷だろうか。でも、どうしても言ってほしかった。今日散々言われた言葉で、耳にタコができているぐらいだけど、どうしても言ってほしかった。

ホームに電車が滑り込む。胸元の桜が風になびいた。がらんどうの車内から降りてくる人はいない。俯いていた彼が、意を決したように顔を上げた。まっすぐ見つめられると、どうしても弱くなる。こんなお別れじゃやっぱり嫌だ、なんて引っ込めた手が彼を掴んでしまいそうで、ぐっと唇を噛んだ。

「卒業、おめでとうございます」

彼はきっとはにかんでいた。あの私の好きな笑顔で。

発車メロディーに急かされて乗り込むと、扉が完全に私と後輩くんを遮断する。そこに凭れて、なるべくホームを見ないようにつり革広告を眺めていた。

週刊誌が騒ぎ立てるスキャンダル。

レジャー施設の春休みキャンペーン。
どこかの専門学校の広告。
気づくともう、景色はホームではなくなっていた。見慣れた風景がただ通り過ぎてゆく。あと指折り数えられる程度しか見られない風景。制服姿ではこれで最後。
ふと上を見上げると、路線図が飛び込んできた。各駅停車はグレーの線。急行は赤で、区間急行になると青。色とりどりのそれを目でなぞって、ある一駅で留まる。
『青葉』と書かれた楕円に、赤もグレーも通っていた。
やっぱりな、と小さく笑った。各駅停車だと青葉駅まで時間がかかりそうな駅数だ。一本後の電車はちゃんと急行なんだろうか。もう、知る由はないけれど。
「卒業、おめでとうございます、か」
かすかな声で言葉をなぞると、彼の声が思い出される。涙声じゃなかった。きちんと、送り出す『後輩』の声だった。今日以外にたいして話したことはなかったけれど、私の大好きな声だった。
胸元の桜を指でつついて、やや逡巡して安全ピンを外す。今年はまだ見ていない、柔らかい桃色のはなびらを一枚一枚整えて、アルバムや証書の入った鞄を開けた。
次に見るさくらの花はきっと本物だろう。そのときに私は東京にいて、後輩くんはこの地でまだ高校生だ。それでいい、それがいい。いつか大人になって笑えるような、今日をそんな日にできたんだから。ざらついたはなびらを撫でて、薄く微笑んだ。造花と共にこの気持ちも鞄の奥底へ閉じ込めてしまおう。取り出すことはきっとないが、それくらいがちょうどいい。
「痛っ……」
ちくりと指の腹に痛みが刺さる。閉じ方が甘かったらしい安全ピンの針が指に刺さった。鞄から手を出して確認してみると、ぷつんと赤い血が出ている。深くは刺していなさそうだが、わりと痛い。
痛くてたまらないから、それなら仕方ないよねと瞬きする。一回、もういっかい。
傘がまた足元で小さな水たまりをつくっている。その日の雨は、夜が明けるまでやまなかった。